

オトタチバナヒメ

先日光透波理論の集中講座でのしめくりに、
「この理論の概要を学んだ人たちの次なる行動は字分けです」
とお伝えした。そう言いながら自分は最近あまり本腰を入れた字分けをしていないということに少し気恥ずかしい思いがしていた。「正に言うは易し、行ふは難し」である。

また、光透波理論を少し学ぶと、様々なサイン（徴候、きざし、啓示現象）が来ることも受講生に説明したが、自分にもいろいろなサインが来ていて、よくまあこれだけ頂いているのに吟味検討を怠っていたものだとあきれてしまった。

順を追って整理して行こうと思い立ったのが今日という吉日。

まず7月17日の朝の夢。ベータシャクティ（無尽蔵のエネルギーという意味）というヒーリング方法を教えてくださった榊田簀齊さん（ますだ こうせい。呼び名はコーちゃん）が出てきて、これからイニシエーションを教えますとのこと。

始めイニシエーションを2回に渡って受けた後、洗面器に満たした水に額を漬けて30分そのままにいるようにと指示された。30分とは長いと思ったが、その通りにしていた。夢だが水の感触や冷たさはちゃんと感じていた。感覚的にはまだ30分経っていないうちにコーちゃんから「静流さんもういいよ」と声がかかった。目が覚めてからそれだけを日誌に書きとめて、字分けをしないで出かけてしまった。

次にずっと日が飛ぶが、9月19日に、いよのいし という人の本を読んだ。その本の中にヤマトタケルノミコトオトの妻オトタチバナヒメノミコトの入水¹（水に身を投げる）の話があり、他の多くの話題の中でそのことが特に印象に残った。「究極の自己犠牲」という、人間の為すことのできる最高に美しい行為だという風に受け止めたのだが、その行為は人間以外の動物ならずいぶん多くの種族が行っている。最近では子供に餌をあたえて自分は食べようとしない雪豹の母親の例もあるように。また自己犠牲を日常に行うことで成り立っているのが生命体の基本的構成要素である細胞と微生物である。細胞や微生物や動物なら普通に行っていることを人間の場合はめったにする人がいないので歴史的事象となるのだろう。これは何故なのか？様々に思いを巡らしながら本を読み終えた。

この5日後のこと。前日の豪雨の後の日本晴れの日の朝、ふと、三浦海岸に行きたいと

¹ 父景行天皇から東征を命ぜられた日本武尊は、走水から船で上総へ渡ろうとしたが、暴風雨に阻まれ、立ち往生してしまった。このとき、同行してきた後の弟橘媛が自ら入水して海神の怒りを鎮め、航海の安全を図った。入水から七日後、弟橘媛の御櫛が浜に漂着し、それを納め御陵としたのが、かつて崎の岩窟にあった橘神社にあったと伝えられる。

それではここから字分けに入ることにする。

ここまでが7月17日という日の朝の啓示の意味として受け止めたものとなる。シチー
詞という智慧は名という命に必ず示されているのだということを教えてくださっている日
に見た夢の解析の一部である。

次に「走水神社」の字分けをしてみる。水（詞、数意）が走っている。最高速度なら絶対止速で「光透波」を意味する。それより遅い速度なら相対的な水で人間はこの相対速度の存在である。つまり至高の叡智ではないという意味。この神社に祀られているのがオトタチバナヒメ、自己犠牲の代名詞みたいな人物である。音に秘められている意味を探ってみると以下のようになった。

音 立
└──┬──┘ └──┬──┘
オ ト タ チ バ ナ ヒ メ

王 透 田 智 場 名 秘 命

前段の解析の内容そのままみたいな文字が並んだ。人間としての理想形のような人の祀られている神社が「走水」に位置していて、しかもその神社には何と次なる不思議な物体が置かれていたのだ。

水雷である。水雷を物体と思って見るのは通常概念による考え方だが、光透波理論を念頭に置いて検証すると、



水は雷（カミナリ→神也）となる。雷とは雨（アメ→天）の田（電磁場）を指す。地上の相対速度の物質や人間の体、そこに閉じ込められている人間の意識などのような拘束された電磁場ではなく、絶対止速の電磁場を意味するのが雷という文字で、それに水がついているものが神社にデンと据えられていたのだ。

9月25日13時31分に水雷を見た。

左の写真は概念である水雷。

ハシリミズ→波詞理實図という場所にある水雷が、詞は天の電磁場で、それが真の「神」の実態、実勢、実質であると受け止めた。ちなみにその日は日本晴れの上天気で始まり、観音（音を観る）崎の海辺のレストランで輝く水面に立つ金波、銀波の景観を楽しんで、食事をして、神社に詣でた後に帰宅したのだが、私たちが三浦半島を去ったのち、大豪雨が始まり、あまりの豪雨の強さに土砂崩れが起き、線路がふさがって、京急線が普通になってしまったのである。水は神でもあるが、地上ではこのように災害も起こすものなのである。天と地の生活の相違を象徴していると感じた。

2012.9.26 記